

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

山岳総合センター高校登山研修会

5月12日、13日の両日、山岳総合センターの高校登山研修会が行なわれた。今年の参加校は4校（中野西、大町北、松本県ヶ丘、池田工業）と寂しかったが、研修生は総勢31名。中でも1年生が18名と過半数を占める中、雪上歩行やテント生活を中心に高校で山岳部の活動として登山を続けていく上での基礎的な技術をみっちり研修した。

池工では1年生を全員と希望する2、3年生を参加させた。1年生にとっては初めての荷物を背負っての登山が針ノ木とは知らない方が聞けばハードルが高いと感ずるかも知れないが、今回山から帰って来た生徒は「難しいところもあったが、技術を身につけられて良かった」「厳しかったが楽しかった」という感想を述べている。そしてどの生徒の口からも「山がますます好きになった」という前向きな意見が飛び出した。

今回の講師は今滝さん（大町北高）、河竹康之さん（長山協事務局長）、傘木靖さん（センター職員、長山協ジュニア委員長）、村田健治さん（センター職員、長山協遭対委員長）と私であった。一人あたりの研修生の数は4名から7名で、目も行き届いた。手前味噌ではあるが、内容的にもある程度系統立てて指導ができたと自負している。新たなスタートを切った山岳センターには、我々の希望や望みを伝えることで育てていくことができる体制になっている。秋には高校生向けのクライミング講座も予定されているので、ぜひ多くの生徒、そして顧問の皆さんの参加を希望する。

公開講座 100万人の山と自然 安全のための知識と技術から

5月18日、日本山岳ガイド協会主催の標記講演会が松本市のMウイングで行なわれた。2009年のトムラウシでの大量遭難を検討した医師の金田正樹さん、運動生理学者の山本正嘉さん、日本山岳ガイド協会理事長の磯野剛太さんらが中心になり、登山者や自然愛好者の安全教育へ向けて夏山シーズンを前にしたこの時期、毎年テーマを決めて全国数カ所で実施し始めて3年目となる講演会だ。今回は立山カルデラ砂防博物館の飯田肇さんの「山の自然と危険——最近の気象遭等に迫る」、長野県警遭難救助隊宮崎茂男さんの「山岳遭難に学ぶこと」、磯野剛太さんの「山と自然安全のための知識——山を歩くための安全対策」の3本の講演が行なわれた。ここでは、タイムリーな話題である飯田さんのお話から少し紹介したい。

今年の連休中、北アルプスでは10名が亡くなるという最悪の事態となった。そしてその死因はすべてが低体温症だった。低体温症の3大要因は「低温」「風」「濡れ」であり、春山の場合は温帯低気圧の発達、通過による気象変化がこれを引き起こす。低体温症がクローズアップされたのは、トムラウシ事故からであったが、あの事故では低気圧後の偏西風による上空の寒気の入り込みと低気圧の進行の遅れが稜線付近の低温と風、雨をもたらした。そしてそのような気象条件の中で引き返しのタイミングを逸したことが事故の大きな原因となった。当時の気象データを詳しく解析したデータが紹介されたが、それによると一日の平均気温は6度、最低気温が3.8度、平均風速は18m/S、

最大風速は24 m/S、雨は出発時から弱くなったものの、前日に濡れた衣服は狭い避難小屋での一夜を過ごしたことで濡れたままの状態であったという。つまり、低体温症の3大要因がすべて揃っていたわけである。氷点下に近い気温、20 m/Sに及ぶ風、加えて雨。さて、このような状態は特異な状況であるのかどうか、飯田先生の話はそこに力点が置かれていた。実際にトムラウシ事故の年、7月16日当日のほか一月の間に同じような気象条件の日が少なくとも3回はあったという。また北アルプスでも2010年8月に剣御前小屋での計測の結果、3回は同様の気象条件があったそうだ。これがデータとして示されるとなるほどという思いを改めて持った。山は夏も寒いもの——我々は経験的にそう考えており、これが特異な現象であるとは思っていないが、現実としてはその点については、やや安易に捉えているのではないかという反省を持った。その意味で夏に低体温症が発生するのは、決して特異な例ではないことを心しておかねばならない。

その他の2本の講演もわかりやすいものであったが、会場は定員一杯の360名が詰めかけ盛況であった。長山協でも一般向けの啓発活動事業として夏山シーズンを前に各支部が主催して「夏山登山教室」を行なう。こちらは主に現地での技術教室の側面が強くなってきているが、色々な団体が色々なチャンネルを使って未組織登山者を正しく啓発することは大事なことに違いない。

西藏(チベット)登山協会代表団来長

先週、長山協と兄弟協定を締結している西藏登山協会の代表団が長野を訪れた。これは本来、昨年11月の長山協創立50周年に合わせて行なわれるはずだったが、政治情勢なども絡んでこれまで延び延びになっていたものである。代表団構成はドゥディツォガ西藏登山協会主席、張明興秘書長、ニマツェリン西藏登山隊隊長と英語通訳のチツェンさん、そこに中国登山協会の交流部の李豪傑さんを加えた5人。僕は2006年に当時長山協会長をされていた柳澤昭夫さんとともに西藏を訪れ、未踏の7000m峰「トンシャンジャンプ」峰の登山許可に向けて奔走したが、それは結局叶うことがなかった。

西藏と長山協との交流はここしばらく具体的なものがなかったが、今回、15日に長山協との間で正式会談の場を設け、協定30年に向けて来年度から毎年何らかの事業を続けていきたいと言うことで、合意した。中には高校生などジュニア層の交流ということも盛り込まれている。時代が協定を結んだ25年前とは大きく変わっているので、具体化するかどうかは未知数ではあるし、困難も予想されるが、夢は持っていないければ絶対に叶うことはない。次なる夢の舞台としてチベットも極めて魅力がある。一緒に新たな夢を追って見ませんか？

編集子のひとごと

山と溪谷社が発行している「ワンダーフォーゲル」に高校山岳部を取り上げたページがあるのをご存じだろうか？すでにお気づきの方もいらっしゃるかも知れないが、このワンダーフォーゲル6月号、お国自慢の山に池工山岳部と鉢伏山の記事が掲載されている。こちらから売り込んだわけではなく、依頼されてアンケートに答えただけで、記事は編集者が書いてくれたのだが、こういうことがあると生徒たちは「スゲー」と素朴に感動する。おだて上手の顧問としては、使えるものは何でも使わなくちゃ。(大西記)